

形成外科

診療科目：一般形成外科、再建外科、頭蓋顎頸面外科、手外科

診療科担当研修責任者名：松田 健（形成外科教授）	連絡先：sotsu@med.niigata-u.ac.jp
診療科連絡先担当者名：曾束 洋平（形成外科総括医長）	

新臨床研修医指導実績：16年度：2人。17年度：2人。18年度：2人。19年度：3人。20年度：0人。21年度：1人。22年度：0人。
23年度：1人。24年度：2人。25年度：1人。26年度：2人。27年度：3人。28年度：1人。29年度：4人。
30年度：1人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：2人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

形成外科学会専門医 7人、レーザー学会専門医 1人、手外科学会専門医 1人、創傷外科専門医 1人、皮膚腫瘍外科指導専門医 3人、頭蓋顎頸面外科専門医 3人、熱傷学会専門医 2人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

形成外科指導医 4人

◇◇◇ 学会専門医修練施設としての認定◇◇◇

形成外科学会認定施設、手外科学会認定施設

診療科の概説・特徴

形成外科はあらゆる手技（植皮術・皮弁移植術、マイクロサーボリーリー、口唇・口蓋裂の形成術など）を駆使し、先天的・後天的な身体の醜状変形に対し、機能・形態を正常にすることで、患者の社会適応を目指す外科学です。最良の形態・機能を再建することは患者のQOLを大幅に改善し、時に人生を変えるほどの影響をもたらします。形成外科単独の診療はもちろん、耳鼻咽喉科・外科・整形外科・救命救急科・脳神経外科・眼科・口腔外科・泌尿器科・皮膚科など、多くの診療科と共に診療・再建手術を行うことで新潟大学医歯学総合病院としてのより高いレベルの治療提供に貢献しています。また、先進医療にも積極的に取り組み、常に世界の最先端を視野に入れた知識と技術習得への挑戦を怠らず精力的に診療に取り組んでいます。

診療科研修の特徴等

比較的小さい局麻手術から大がかりな再建手術、先天奇形や難治性潰瘍、外傷など、当院では形成外科の診療領域のほぼすべてをまんべんなく経験することができます。多様な症例を通して様々な「きず」をどのように診て、扱い、きれいで修復するのかを学んでもらいたいと考えています。当科では基本的に上級医師も患者の主治医としてチームを組んで治療にあたる体制にしており、手術目的、その具体的な内容、術直後の指示、退院までの治療計画等につき直接学ぶことが可能です。担当症例の手術には助手として参加し、上級主治医から局所解剖や手術の要点についての詳しい解説を受け、これらを通して形成外科の基本である皮膚縫合、皮膚移植術などの指導も同時にうけます。また、当科では顕微鏡下でのマイクロサーボリーリーの体験、訓練を行うことのできる設備も整っており、上級医から血管・神経の縫合法の技術指導を受けることが可能です。外来においては、予診のとり方、写真撮影法などを習得し、上級医師の診察について、所見のとり方、治療計画のたてかたの指導を受け、担当症例の短期成績あるいは、類似症例の長期結果を学ぶことになります。

小児外科

診療科目：小児外科

診療科担当研修責任者名：木下 義晶（小児外科総括医長）	連絡先：kinoppy@med.niigata-u.ac.jp
診療科連絡先担当者名：木下 義晶（小児外科総括医長）	

新臨床研修医指導実績：16年度：9人。17年度：11人。18年度：9人。19年度：1人。20年度：4人。21年度：6人。22年度：0人。
23年度：4人。24年度：1人。25年度：0人。26年度：1人。27年度：1人。28年度：2人。29年度：1人。
30年度：0人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：2人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

日本小児外科学会専門医 1人、日本外科学会専門医 4人、日本小児泌尿器科学会認定医 1人、小児がん学会認定外科医 1人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

日本小児外科学会指導医 1人、日本外科学会指導医 1人

◇◇◇ 学会専門医修練施設としての認定◇◇◇

小児外科学会認定施設

診療科の概説・特徴

当科の歴史は、新潟大学外科学教室の中に小児外科研究班が生まれた昭和45年に遡ります。その後昭和56年に診療科が付属病院に開設され、それから10年間の診療実績が評価され平成3年に小児外科学講座として独立し現在に至っています。国立大医学部で小児外科講座を有するのは12大学しかなく、小児外科の臨床・研究に大きな業績を上げてきました。過去40年以上にわたる豊富なデータを有し、過去の実績に基づいた確かな診療を行う一方で、内視鏡手術など最先端の手術手技を導入し更なる発展を見せてています。また、他科の小児診療チームとの連携も確立しており、総合的な小児医療を学ぶことができます。

また、小児固形悪性腫瘍の治療では、Niigata Tumor Board を40年前からたちあげ、新潟県全体で統一した治療を行い、良好な成績をおさめています。

診療科研修の特徴等

小児外科は、原則として一般小児外科研修を基本とし、その他新生児診療・小児救急疾患への対応等を広く研修できるシステムになっています。短期間の研修であっても、小児外科だけではなく外科学的周術期管理の考え方、検査の目的と異常所見の意義（成人と小児を比較しながら）について理解することができます。また、毎日、指導教官、研修医、学生で行う朝カンファレンスに参加することで各症例の病状プレゼンテーション能力をトレーニングすることができ、かつ腹部・胸部Xp、CT、MRI、造影検査、シンチグラフィー等の臨床医として必須の画像検査を全員でディスカッションすることで、画像診断能力も高めることができます。手技的な実地研修においては、比較的容易な手術の執刀、小児外科手技の習得の他、日常診療の中で乳幼児の採血、静脈ルート確保等、将来の専門分野に関わらず、臨床医としての必要技能をスキルアップできると思います。